

「参画と協働」の先進的な活動事例

県内各地で多彩に展開されている活動から、平成20年度に話題となったものなどについて、その一例を紹介します。

外国人住民との文化交流

(神戸市長田区真陽地区民生委員児童員協議会)

神戸地域

神戸市長田区真陽地区は、アジアの外国人が市内で一番多い地区です。下町情緒が残る住みやすいまちですが、外国人との間では言葉の壁や習慣の違いなどからトラブルも多く発生しています。

お互いを認め合い、地域のマナーを伝え、安心して安全な地域づくりにともに取り組むため、商店街、婦人会など地域団体、FMわいわい、神戸定住外国支援センター等が協力して、外国人との文化交流のイベントを開催しました。

インドネシアのガムランの演奏、韓国の農楽演奏、子どもも参加するベトナムやタイの民族衣装でのパレード、日本の盆踊り、アジア各国料理の屋台の出店などで大いに盛り上がりました。

最初は互いにぎこちなかったのですが、屋台を出店する外国人と食を通して気軽に話し、民族衣装や踊りを一緒に楽しむことで、一緒に笑い

合えるほどになりました。子どもたちが通訳をしたことも交流が進んだ要因です。

今後も、外国人をより理解し、顔の見える関係を築き、各団体との協力体制のもと、活気のある、安全安心な地域づくりを進めていきたいと考えています。



地域みんなの力で魅力的な立体花壇をつくる

(甲子園八番町自治会甲子園筋緑化ボランティアグループ)

阪神南地域

西宮市鳴尾地区は、少子高齢化が進む一方、大型マンションや大型商業施設の建設に伴い住民の転入が増え、コミュニティとしてのまとまりが難しくなっています。

この改善のため、環境緑化活動と学童支援事業を基本に、団塊世代の潜在能力の顕在化と地域・大学・企業の協働を図ることでコミュニティの活性化を促しました。

甲子園筋緑化ボランティアグループが開発した乾燥芝を土壌代わりに草花を育成する技術を活用し、壁面緑化する立体花壇を造りあげました。立体花壇は地域学童に無償貸与する植栽可能な195のコンテナを内蔵した瓦・タイル・メタルの各模様で成り立っています。

花壇の整備には、地域の定年退職者の技術と知識の提供、武庫川女子大学・甲子園短期大

学・修成建設専門学校の学生ボランティアや、地域の学童・保護者による花壇づくり、企業からの寄付等の協力を得ました。

来期には、地域・大学・企業から「ガーデニング教室」の併設案が提案されており、地域の活性化が進みつつあります。



中高生による音楽を通じた世代間交流 (Sounds of Teen フェスティバル実行委員会)

阪神北地域

音楽・芸術のまち“たからづか”を自分たちの手で盛り上げるため、市内の中高生が実行委員会を結成し、平成21年2月に音楽イベント「Sounds of Teen フェスティバル」を開催しました。

開催準備として、フレミラ宝塚(市児童センター)を利用している延べ382名の中高生が集まり、行政への助成金申請や企業への物品提供の協力依頼、イベントへの参加を呼びかける広報誌の配布(市内の中高生全員)などを行いました。

フェスティバル当日は、家族や友人、お世話になっている地域住民、老人クラブの人など294名が集まりました。

中高生が主体的に企画・実行したイベントを中高生同士にとどまらず、多くの人に発信でき、世代間交流を図ることができたことが大きな収穫になりました。

これからも音楽活動を通じて宝塚のまちを元気にし、地域に還元できるような事業を続けていきたいと考えています。



子どもが海の生き物と触れ合う「出前水族館」 (播磨マリン・クルー)

東播磨地域

子どもらに海の魅力を伝えたいと、タツノオトシゴ、タコ、アナゴ、サメ、エイ、カニ等を水槽等に入れ、保育所や小学校へ出前講座をしています。海の生き物に触れられる移動型の水族館は、毎回、生き物を手にした子どもらの歓声に包まれ、大好評です。

活動の中では、タツノオトシゴ、タコの出産など珍しい映像も見せています。平成20年度から新たに加わったメンバーは、高齢者大学で学んだことを生かし、海の生物を精巧に切り絵で表現し、披露します。作曲家であるメンバーの一人は、瓶に貝殻などを入れた楽器づくりと演奏、波の音や汽笛、イルカの鳴き声など海に関わりのある音を使って子どもに音遊びの楽しさを伝えています。

7年前、一人で移動水族館から始めた活動は、

音遊び、切り絵など他分野の専門家をスタッフに迎えて活動の幅を広げ、今年度はさらに折り紙遊びも加わりました。

これからも、自然に親しんだり、物を作ったりする機会が少ない子どもたちに五感を養う場を提供したいと考えています。



地産地消による地域の活性化 (マイスター工房八千代)

北播磨地域

マイスター工房八千代は、地元農家の主婦グループが地元で栽培される農産物にこだわって総菜や特産品の開発・販売、学校給食・加工体験指導等を通じた食育を推進するほか、喫茶店、エステなどを地域住民へ提供しています。

昨今、地域ではシカによる農作物被害が深刻化し、捕獲対策を強化しています。しかし、シカ肉の有効活用が進まず、大半は廃棄処分されていることから、工房では新たにシカ肉を地域資源として活用するため調理技術の開発に取り組みました。シカ肉は低カロリー、高タンパクといった優れた特長を持っているので、多くの方に食べてもらいたく、試行錯誤を重ね、レシピ集作成に協力しました。

また、今年6月には、地域の老人会の人を招いて交流会を開催するなど、地域の交流の場としての機能も充実してきました。地産地消の拡大、

地元住民の働く場の創出、住民の交流やサービスの場の充実など多くの面で地域の活性化に貢献しています。



老人会が中心となった「一校区一家族運動」の展開 (姫路市菅生校区あおぞら会)

中播磨地域

自然に恵まれた農村地帯である姫路市菅生地区は、近年、新興住宅地として住民は増えていますが、地域の連携や交流は稀薄化傾向にあります。地元の菅生小学校では週5日制の実施に向けて子どもを地域で受け入れてもらう方策を模索し、一方、地域の老人会では孫の世代を育てたいとの思いが合致し、地域で子どもを育てる一校区一家族運動として、平成15年、連合自治会を母体に「あおぞら会」が発足しました。

会場の提供や参加者の募集に小学校が全面協力をし、地域や家庭とも連携のもと、高齢者が経験と知識を生かして、小学生が仲間や多様な世代の住民と交流する行事を企画運営しています。

田植えから脱穀までの農作業体験、竹細工、お手玉づくり教室、自分たちで育てたひまわりの写生会、グランドゴルフ大会などを通じて、子ど

もたちはさまざまな体験活動や地域の文化に接しながら生きる力や郷土愛を育て、そのことが高齢者のスタッフにとっては生きがいづくりや健康増進につながっています。



ふるさとのシンボル「ムクノキ」を守り、生かす (ほんまにええとこ・新宮)

西播磨地域

新宮小学校旧校舎のシンボルであった樹齢360年とされるムクノキとケヤキの衰えが目立ち始めたことから、卒業生らが「**棕の木を守り共に生きる会**」を立ち上げました。治療費を捻出するため平成20年度に募金を訴えたところ全国から435件、約300万円が集まりました。

これをきっかけに農林水産省の地域力発掘支援モデル事業に選ばれ、5年間で千百万円の補助金を受けることになり、同会のほか、地元の連合自治会(8自治会)、新宮まちづくり推進委員会、新宮八幡神社と越部神社の秋祭り伝統行事や地域の伝統農事を継承する会など14団体から構成される「ほんまにええとこ・新宮」を設立しました。

本活動では、20年度にムクノキの診断・処方箋の策定、根域保護などの保存処置、ムクノキの集いの開催、見守り活動として環境学習を実施し

ています。引き続き、里山や紅葉谷の整備、伝統行事の継承などを進めるとともに、ムクノキの種から苗木を育てる「命の木のリレー」の実施や、ムクの実の特産化研究や、特産品開発など地域の活性化につなげていきたいと考えています。



人と生き物とコウノトリが共生できる新田の郷づくり (豊岡市新田環境会議実行委員会)

但馬地域

新田地区では、コウノトリと共生する地域づくりをめざし、無農薬栽培による安全・安心な米の生産とともに、田んぼのカエルやドジョウを増やすことを目的とするコウノトリ育む農法を推進しています。

これら活動は平成19年まで新田小学校の全児童が率先して取り組んできたものですが、地区では同年「新田環境宣言」を採択し、地域をあげて環境保全・創造へ向けた取り組みをすることを決定しました。同宣言の実践に向けて、まず、平成20年度は、新田環境会議実行委員会(新田の区長会、農地・水・環境保全委員会、農事組合法人、地区農会、新田小学校等から構成)に組織を改編することから始め、地域ぐるみで取り組むことを区民一人ひとりが再認識しました。昨年11月には人と田んぼとコウノトリと世界をつなぐシンポジウムを開催し、講演会、研究発表、海外の

若者を招いた意見交換等で住民相互の理解を深めました。また、地区ごとには「水・環境・農地」の改善に取り組む活動がされています。

新田の郷からさまざまなエコ活動の取り組みを発信し続けたいと考えています。



古市焼の再現でまちを元気に (篠山市古市自治会)

丹波地域

かつて交通の要所として栄えた古市は、交通形態の変化、住民の高齢化や若年層の流出により地域力の弱体が懸念されています。古市自治会では、約200年前に古市で作られていた磁器で原材料の陶石の枯渇等により廃れてしまった「古市焼」の再現を通して、世代間・地域間の交流を深めようと考えました。

古市焼再現への挑戦は、半製品の風鈴の絵付けから始め、できあがった風鈴は地蔵盆の期間中、各戸の軒先に吊し、絵付け作業の風景などを絵はがきにして古市に縁のある人たちに送付し、ライトアップ等も予定して地蔵盆への参加を広く地域の内外に呼びかけました。

多くの参加があり、古市焼は地域内外の交流を深めるとともに、他の地域で暮らす子や孫の帰郷の機会になり、家族の絆が深まりました。

古市塾の講座では、古市焼の遺跡や歴史的

建造物への探訪をしています。同会の活動は、地域内に点在する古跡や文化財を対象を広げ、説明パネルの制作や小冊子の発行など、地域の歴史を再認識する機会が増え、活動が広がりをみせています。



田舎暮らしで農村ににぎわいを (NPO 法人ふるさと応援隊)

淡路地域

少子高齢化が進み、寂れた古民家が目立つ南あわじ市倭文地区の住民らが、耕作放棄田や空き民家、田舎暮らしのノウハウなど地元の資源を活用して、「農」をテーマに都市と農村の交流を進め、にぎわいを取り戻そうと「ふるさと応援隊」を立ち上げました。

月1回の京阪神地区からの農村ボランティアの受け入れ、小学生の農業体験学習、田舎暮らし希望者に情報や支援制度などを紹介する相談会「農村塾in倭文」の開講、田舎暮らしを希望する人に空き家を紹介する南あわじ市の「空き家バンク」制度の運営への協力などに取り組んでいます。

「薫陶の郷」前の耕作放棄地約40%を市民農園として整備し、平成21年春に正式オープンしました。障害者や高齢者も利用できる区画を整備し、また、マンパワーや経済効果が大きい

企業や法人など団体利用者用の農園も始めています。さらに都市と強固な関係を築いていきたいと活動を進めています。

